研ぎ澄まされた人たちが楽しんで働く そんな場所を実現したい

リゾート・産業・文化を活かす「但馬ワークプレース・プロジェクト」について、ITを駆使した事業を展開している豊岡市出身の小田垣栄司さんにさらに詳しくお話しいただきました。

【取材】2020年3月11日、東京・新宿 ㈱ノヴィータ

小田垣栄司さん　㈱ノヴィータ代表取締役会長

ポテンシャルを信じて引き出す首長の存在

豊岡でうまくいっているビジネスモデルと同じことをと依頼されて他県にも行きますが、お話しすると「そんなに簡単じゃない」と気づかれます。全国どこでもポテンシャルはあると思うんですが、信じて引き出そうとする首長がいるかどうかが鍵だと思います。具体的に動けて、長期にわたってやり続けられている首長さんは、それぞれに特徴だった成果を残されている印象があります。

自治体はものすごく大きな資産を持ち、長期にわたる政策を考えて実行していくことが求められます。政策がどんどん小さくなればなるほど、民間に委託しよう、民間でも大企業がやっていることを小さくして中小企業に、もっと小さくして零細企業、さらに個人事業主へという風潮の中、豊岡市という人口8万人の市で新しく大学をつくり、乳児から大学卒業時の22歳までの人口を何とか面倒みるところに投資したい市長がいて、それを「面白いからやってみよう」と言う県知事がいる。ポテンシャルを引き出す人がいる、と私が申し上げているのはそういうことです。

豊岡市は、民間企業がやれない規模感、レベル感の事業をやっています。大学を持ってくる、芸術に投資してみる。そういうことは、一般の民間企業では「いつ利益になる?」「目的は?」と誰もハンコが押せない。ここに財政投入できている点が、他の自治体と大きく違います。鳥肌が立つぐらいの覚悟と実行力を持ってされている。投資家のジェフ・ベゾスさんが「株主に還元はしません。赤字出します。もっともっと投資します。だからもっと株価を上げます」と言うのと変わらないぐらい前向きなことをされている。そして、何となくでも成果が見えつつある。豊岡市が他の自治体と何となく違う経緯をたどっているのが、外からだとよく見えるんです。

大学で学ぶ芸術を学生が新しいビジネスに活用

来春開学予定の国際観光芸術専門職大学（仮称）が豊岡にあることによって、そこで育つ人たちがビジネスを始めることができると思っています。会津若松市に会津大学というシステムエンジニアをつくる、ある種の専門職大学がありますが、私は大学の目の前に会社を持っていて、大学生に開発の仕事をしてもらっています。同じようなことが豊岡でもできるんじゃないかなと思います。

芸術も恐らくビジネスに活用する方法があるのではと私は期待しています。そうなると恐らく「豊岡でしかできない」事業ができる。働きたいのに働けないお母さんは日本中にいるけれど、大学で芸術を学んでいる人はすごく少ない。それが豊岡にあるとなると、会津のように大学生が何かビジネスできる仕組みを用意する。大学生は、自分が学んだことを実践できる会社でアルバイトができる。それを観光資源と連動させられないかなと発想しています。具体的には例えば、日高町の神鍋エリアで遊休している宿泊施設で泊まりながら企業が研修をしていくようなことができるのではないかと。

最先端のITの先にある高度なコミュニケーション

最高に高度なITはコミュニケーションだと僕は思っていますが、今ITが志向する最先端はコミュニケーションがいらない世界です。ボタンを一つ押せば、まばたきを一つすれば、すべてが伝達できる世界。その最先端の先にある「もっと高度なコミュニケーション」は、会って、触れ合って、信号だけでは感じられない何かを感じる世界。芸術の中でも恐らく舞台芸術が持つ、その瞬間、その場にいなければ味わえない世界ではないかと。

スマートフォンなどのデバイスを通じるITは、ITのバージョンでは2・0ぐらいで止まっています。ある種のインタラクティブはあるが、信号によって置き換えられている。それが5・0になると、再現できない世界になる。いずれそういうことが語られ始められる前に、僕はここでそれを語っておきたい。

その瞬間しか味わえないから行きたい。最近はやりのアニメを演劇にした2・5次元の世界観を見ていると、趣味が尖（とが）っている若い子たちはコミュニケーションの先がだんだんわかってきたんだなとすごく感じます。幅広くいろんなことをやっていると、研ぎ澄まされる感覚が足りません。オタク系文化に触れている人たちは、狭い世界でどんどん深掘りしている。アニメの原作がすごく好き。それをお気に入りの俳優が舞台でやる。昨日よりも今日の方がうまくなっていたり、その次の日は下手になっていたり。それは、ものすごく高度な表現の差を味わいに行っているわけで、すごくぜいたくで進化していることなのです。それがきっと舞台芸術の面白さであり、コミュニケーションの行きつく先にあるんじゃないかなと思っているのです。

そして、舞台と観客の双方向コミュニケーションにスマートフォンを使ったりすることで世界はどんどん変わっていくはず。そういうリアルなインタラクティブが舞台で行われると、舞台で行われていることを習いたい人が現れてくる。彼らは恐らくコミュニケーション、ITを深く理解している人たちでしょう。

「小学生にプログラミングを教えましょう」と言っていますが、スマートフォンやパソコン上でやっているITは、皆ができるようになっていくので、それだけをやっていても差別化できない世界がそのうち来る。その時、その先にある高度なITって何ですか？　より複製しにくいもの、簡単に作れないものって何ですかとなると、舞台芸術、音楽、再現性が極めて低いもの、修練が必要になるものに面白みがある。

小手先のスキルでプログラミングを教えるのは意味がない。どこが勘所かを理解するために、何かを修練して学んでおく。その一つがたまたまプログラミングだし日本画だし、英語や舞台芸術かもしれない。勘所がわかるまで一つのことをやり込んでいくことが大事なんです。

毎回見て同じもの、いつでも見られるもの、誰が作っても同じものは、もうつまらない。毎回違うから楽しくて、他の人にはわからないその違いをわかることが乙なこと。そういう世界は高級な趣向のものとして残っていくと思います。もちろん、そうではないものも数多く残ると思いますが、僕のふるさと豊岡市で残していきたいのは、大量のお金があって大量の人がいればつくれる世界ではなく、何かに特化して研ぎ澄まされた人たちが楽しむ場所なのです。

やりたいことをすれば働くことが楽しくなる

働くことが苦役だという昭和っぽい発想が日本中にありますが、本来の仕事は、自分がやりたいことをやってみたら、誰かの役に立って感謝され、次もやってもらいたい、あなたにも生活があるだろうからその分これを払うねというところがスタートのはず。やりたくない人が仕事すると管理コストが高くなる上に、仕事が回りません。

決められたことを決められた手順でやる働き方はITに置き換えられ、どんどん減っていきます。それらは人間が最も苦手とするところ。思考をはさむなということですから。これからの仕事は、個差を前提にして「あなたがやりたいように、この方針の中でやってくれ」という高度なコミュニケーションに耐えられる人にしか残らないでしょう。

成果物が納期に上がってくれれば、労働時間を管理する必要がありません。豊岡の事業所で働く女性たちからは「働いていて楽しい」というキーワードが自発的に出てきてほしい。働くのは楽しくて、やめられない。お母さんがそうだと、子どもがすごく変わりますよ。

また、今のリタイア世代は、自分がやって来た経験を使って、もっと社会とつながっていたい、培ってきたノウハウを社会に還元したい人が増えています。実はこうした人たちにどう社会につながっていただくかという挑戦を、豊岡の隣、養父市でノヴィータとは別の法人で始めています。県下、特に但馬地方のいろんな自治体の首長さんが「やりたい」という強い意志を持って、現場まで指示を出していただけるのであれば、アイデア、やり方、ハウツーやノウハウは、僕がいくらでも東京から持って行きますよ。